2021年度 第3回 大田区介護支援専門員全体研修 質問と回答

※回答については例としてお答えしています。

事例において必ずしもすべてに共通するものではありません。
ご了承ください。

- ① 外から鍵をかけないと徘徊してしまいます。デイから帰宅して家族が帰るまでの数時間ですが、現在外鍵をかけていただいています。(デイの方に)しかし、鍵をかけると直ぐ騒いでいらっしやるそうです。どのような支援がありますか？

① の回答

外鍵は「身体拘束」＝身体的虐待にあたることは、川崎先生の講義でも説明されています。

厚生労働省が発行している「身体拘束ゼロへの手引き」22ページに示されている緊急やむを得ない場合の対応にあたる可能性があります。ただしこれには3つの要件があり「切迫性」「非代替性」「一時性」を満たしていなければなりません。また3つの要件を満たしていても、留意点があり慎重な取り扱いが求められています。

介護保険指定基準においても身体拘束禁止規定があり「サービス提供にあたっては、当該入所者（利用者）または他の入所者（利用者）等の生命または身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束その他入所者（利用者）の行動を制限する行為を行ってはならない」としています。また「緊急やむを得ず身体拘束を行う場合には、その態様および時間、その際の利用者の心身の状況、緊急やむを得なかった理由を記録しなければならないものとする」と通知されています。具体的な記録は「身体拘束ゼロへの手引き」24ページ、25ページを参考にしてください。

家族が帰ってくるまでの時間、一人で自宅で待っていることが困難であれば、本来その時間に本人の生命に危険が及ばないように、自費のヘルプなどで対応する必要も出てきます。外鍵を使用せず、本人が徘徊する危険も防ぐ方法がないか関係者会議を開催して支援内容を検討してください。

経済的な背景や、様々な問題があるケースが多いので、関係者会議を開催の際、包括にご相談ください。

- ② 虐待と認識できても、中途半端な関わりだと更に事態が悪化することが予測され、本人が仕返しが怖いという場合、包括に相談しても前に進めない事例があります。

② の回答

事態の悪化を恐れる、ということは、ご本人は現状認識ができる、判断ができる方なのでしょうか。

虐待と認識できている場合、包括に虐待通報をしていただいていますでしょうか。高齢者本人が「怖い」「痛い」「辛い」状況を話せる方、あるいは身体的虐待による身体状況を

観察させていただける方であれば、包括が養護者のいない場所で、ご本人から直接状況をお聞きし、事実確認を行います。またケアマネジャー、デイサービス等の職員に現状をお聞きし、ご本人の話した内容の確認をします。ご本人に認知症があり、自ら虐待の状況が説明できない場合には、「怖い」か、「痛い」かなど、ご本人の表現しやすい内容で、虐待の事実がないか確認させていただきます。事実確認はたくさんの情報があれば、今後の展開を予測し、ご本人にとってより良い解決に至る第一歩となります。「相談してもうまく行きそうにない・・・」と思われても、一人で思い悩むよりは、関係者に相談し、重荷を分担することも必要ではないでしょうか。

包括には相談しにくい・・・などご意見がありましたら、管轄の地域福祉課でもお話をお伺いできますので、まずはご相談ください。また後見人など、ご本人の代理人がいれば解決しやすいと考えられる場合は、社協の後見センターで相談ができます。合わせてご利用ください。

- ③ 泊りの施設サービスは施設が許されていると思われるのですが、法権根拠はあるのでしょうか？また、デイはなぜダメなのでしょう？

③ の回答

入所や入居に関する施設に関しての施設においては、施設管理権によるものと考えることが出来ます。施設管理権に於ける治安を保持する為諸権限では、当該施設の治安を保持する為に社会一般的に認められる権利は、憲法に規定される基本的人権に抵触しない程度で、刑法等の現行法に抵触しない範囲での人や物の行為・言動を制限するものです。

またこれらを制限する場合対象とする者がいる場合にあっては具体的にその制限する内容を勧告する、不特定多数に制限する場合はその内容を文書等の方法で広報掲出する事により権限を行使できるものとされています。

あくまでも入居・入所者の安全配慮義務に基づいて行うものであり、行動の制限のために行うものではなく、セキュリティ上で行う行為と理解してください。

- ④ 家族の関係性などから、どの段階で通報すべきなのか判断に迷うことがある。軽微なことを（こういってはアシですが）イチイチ全て報告していたら包括の職員も対応が難しいのではないかと。暗にそんなことで報告しないでください的なことを言われたことがある。

④ の回答

少しの異変が、その後大きくご本人に影響するかもしれません。虐待防止法は「予防」にも大きな意味があります。

例えば介護者が「大きな声で怒鳴る」は耳の遠くなった、理解能力が低くなってきた高齢者に聞き入れてもらうための手段かもしれません。ただ近隣からは「高齢者に怒鳴っている」「大声を出して脅している」と聞こえてしまいかねません。研修の中で自覚の有無についてお伝えしていますが、無自覚のために大きな虐待事案に発展するかもしれません。

ん。一生懸命介護しているのに、それは虐待に当たるかもしれない、そのことはケアマネジャーを苦しめることもあるかもしれませんが、小さい出来事からご相談していただけたら、大事に至る前に虐待を防止できる可能性があります。

包括でも、ケアマネジャーの話にアンテナを高くはってお聞きいただければ「虐待ではないか?」と判断ができます。

- ⑤ 虐待という言葉は悪い・マイナスのイメージがひとり歩きしている。家族へ話す時にいい言葉はありませんか?

⑤ の回答

「虐待」という言葉をストレートに伝えても、拒否反応であったり、拒絶にあう可能性があります。ご本人にあざやけがの確認をした場合、なるべく早い段階で介護者にあざや傷ができた状況を確認しましょう。「段差につまずいて転んだ」「よろけてぶつけた」「元々出血傾向がある」、など理由を聞くことも必要ですし、介護者が介護に困っている状況がないかどうか確認してください。

その上で、「手をあげてしまった」「失敗した時にイライラして怒鳴ってしまった」などの訴えがあれば、暴力はいけないこと、介護方法の改善を提案する、本人の認知症が進行していないか医師にそうだんするなど話してみましょう。研修でもお伝えしたようにご本人の気持ちを代弁していただくことも効果的です。「痛い」「嫌だ」「怖い」など思っているのではないのでしょうか。

- ⑥ 虐待の通報が義務（できれば早期）は分かりますが、ケアマネがもっと相談しやすい機関・体制など、他の保険者含めてありませんか?

⑥ の回答

相談しやすい場所は地域の包括支援センターが一番良いと思われます。相談がしづらいとお感じのことがあるのでしょうか。ケアマネジャーの声を聴き取ることは、ご本人支援には欠かせないことであると考えます。

虐待?かどうかわからない疑問に思ったらまずは地域包括支援センターにお電話ください。厚生労働省や東京都のHPでも高齢者虐待の窓口は地域包括支援センターを案内しています。

高齢者の権利擁護のご相談であれば社協の成年後見センターの利用ができます。福祉法律相談（福祉従事者のための専門相談）もありますのでご活用ください。